

	平成21年7月6日 長野県長野ろう学校 校舎改築委員会	1 2
---	-----------------------------------	-----

松本ろう学校視察、信州大学庄司先生懇談報告

7月2日(木)松本ろう学校の視察と信州大学の庄司和史先生と懇談をして参りましたので、その報告をさせていただきます。

【松本ろう学校】

松本ろう学校では、教頭先生の小林先生に案内兼お話を伺いました。松本ろう学校は、敷地が広く、長い廊下の両側に各部ごとに棟があります。聴力検査室は2つあり、作り方も参考になりました。案外部屋数は少なく、コンパクトにまとめてある校舎でした。しかし、必要な部屋や設備は新しい校舎では位置づけたいと思います。小林教頭先生との懇談では、主に支援センターについて話題になりました。支援センターについては、『どんな障害についても相談できる』というコンセプトを提案いただき、『早期の支援から就労まで対応できるようなもの』というような、福祉と連携して、すぐに関わってもらえるような人脈作り、関係作りも大切にしていくようにとのアドバイスもいただきました。「『あそこに行けば良いぞ。』と、思ってもらえるような実績を作っていく」必要性も話していただきました。

長野県に2校のろう学校。これからも、情報を共有しながら協力し、長野県の聾教育がより発展していくようにしたいと思います。

【庄司和史先生との懇談】

庄司先生は、今年から本校の幼稚部でもご指導いただきお世話になっていますが、長年筑波附属ろう学校の幼稚部や乳幼児指導をされてきた先生で、筑波附属ろう学校の改築にも関わった先生です。

《改築にあたって》

筑波大学の施設課の人と話し、そこで予算付けもしてもらったそうです。担当の人を納得させなければ何も進まない。普通の学校建築法等については知識のある人ですが、聾教育についてほとんど知らないの、聴覚障害とはどんなもので、どんな施設が必要なのか、とにかく何度も何度もやりとりをしたそうです。教室の案も3つか4つ位は作って、この教室はなぜ必要なのか、何のために使うのか、全て細かく理由を書き、熱意を持って説明していくうちに理解を示し、逆に更に使いやすいようにアドバイスしてくれるようになったそうです(やはりあきらめてはいけません)。特に、「通常の学校にはない乳幼児の部屋や保護者の部屋がなぜ学校に必要なのか。聴力検査室は病院でもないのになぜ必要なのか。防音室にして中で何をやるのか。」聾教育に携わっていない人達には、本当に一つ一つ丁寧に説明をしていく必要性を感じました。とにかく分かってもらえるまで。筑波でも、それぞれの部門でチームを作り交渉に行ったそうです。頻りに打ち合わせをし、そして、どんどん具体的になっていくと、小さな物ではコンセントの位置や窓の高さに至るまで細かく、打ち合わせをしていったそうです。筑波の場合は、保護者が作る段階で関わることはなかったが、やはり、情報を出し、公開していくことは大事。と言うことで、本校のように保護者の皆様に関わっていただくありがたさも改めて感じました。

《施設・設備について》

- ・駐車場のスペースも絶対必要なので確保すること。
- ・聴力検査室は0歳～18歳、あるいは卒業後も必要になってくる。また、地域のセンター的機能も果たし、三輪分校の聴覚に関してフォローしていくと考えれば、

やはりとても大切な場。防音だけでなく、相談もできるような部屋だと良い。そして、やはり幼児用と中、高用とは分けた方がよい。幼児用は重複生も使えるし、中、高用は地域の方への対応もすると利用率はある。地域の難聴学級の子どもたちも来る。インテグレ生も来る。卒業生も来る。検査室と補聴器の点検室（自立活動室）は、多くのニーズがあるので充実をさせる。聴力検査室も、どれくらいの頻度で使うか。1週間に1度くらいの割合で検査した方がよい時期もある。学校の検査室は、病院とは違い、病院は診断だが、学校は教育的評価のため。また、純音検査だけでなく、語音弁別検査等もやるため、防音も強調する。また、備品や機器もどんなものを入れるか考える。「こういう検査がしたいから」と要望を出して、業者さんに見積もりを出してもらうことも良い。

- ・特に中・高は黒板もどんな物がよいのか考える。普通の物がe-黒板かホワイトボードがよいのか。
- ・ループ、赤外線、FM等の集団補聴システムについてもよく検討をし、話を聞き、決めていくのがよい。
- ・補聴器の調整も教育的評価として、定期的に点検もしたいので、先生でもできるようにソフトも必要になってくる。
- ・乳幼児のトイレはトイレトレーニングの場。広いスペースで、ついたてがなくても良い。おむつ交換台も必要。洗濯機もデモのため必要。
- ・デモルームはある程度家庭環境に近い物があっても良い。他の部屋と兼ねても良い。人数は少なくても必ず必要。0歳の子が過ごしやすい。保護者が過ごしやすい。ということを考える。単に保育ができればよいのではない。

《聴覚支援センターについて》

- ・センターについては、色々な相談を受けられる場にできるとよい。待っているだけじゃなく出掛けていくセンターを考える。職員は、STなどの医療資格に拘らず、保育士さんや看護師さん、カウンセラー、臨床心理士等がいるとよいのでは。STは（人にも依るが）聞こえなくてはならないと言うスタンスで関わるようになるので。窓口には、福祉に詳しい人が必要かも。聴覚障害を持った方がいると良い。
- ・まずは、先生達も自立活動教員の資格試験を受けるとか、持っている先生を呼ぶとか、教育オーディオロジーの研修を受けるとか、一番は先生達かもしれない。人材育成をどうするかが大切。

《特別支援教育について》

- ・特別支援教育は、「一人一人のニーズに応じた」ものなので、障害によって、教育の目標は違う。聴覚障害と知的障害では、コミュニケーションモードも違う。日本語を話しても聴覚障害児は視覚的に話している。一緒にすることには無理があると言うことを言い続けて欲しい。
- ・聴覚障害児は見た目では余り目立たないし、要領も良いので、大丈夫と言われてしまっ、大変さが伝わらない。どんな大変さがあるのかをしっかりと伝える。
- ・200億円の理科教育設備の整備費の予算もついたので、実験や情報や実体験を大切に学力をつける。

とにかく、「無理かな」と思わず、語って伝えること。と助言をいただきました。

これからも、色々な智恵をお借りしながら、改築を進めていきたいと思います。

【今後の予定】

- ・7月中旬・・・長ろう教職員，PTA合同校舎改築委員会（予定）
長ろう、長養、県教委研究会（予定）
*開催については検討中です。
- ・8月上旬・・・おおまかな設計、平面図まで検討する予定。
- ・9月上旬・・・9月の県議会に予算申請（予定）